追悼　藤枝征司先生

夢幻（無限）の祈り

社会学部教授　関　哲行

私が初めて藤枝先生にお会いしたのは，今から18年ほど前，社会学部が発足した時である。同じ茨城の出身で，研究領域もイタリアとスペインと比較的近かったことから，いつしか言葉を交わすようになった。私が藤枝先生と親しくお付き合いさせて頂いたのは，この10年ほどであるが，剛毅で曲がったことの嫌いな先生であった。豪放磊落な反面，繊細，几帳面で教授会などの議論を細かく書き留めておられた。佐伯学園長はかねてから藤枝先生のそうした一面を評価しておられたが，慧眼の一語に尽きる。

藤枝先生とのお付き合いが深まったのは，先生の下で副部長としてサッカー部の顧問を引き受けてからであった。カラオケと車の運転がお好きで，愛車アルファ・ロメオに何度か同乗させて頂き，サッカーの応援に赴いた。

一昨年の12月に体調を崩され，入院された。それまではお元気であっただけに，突然の入院に多くの方が驚かれた様子であった。柏市の国立がんセンターに転院された後，何度かお見舞いに伺った。丁度サッカー部が優勝争いをしている時期で，藤枝先生と二人，サッカー部の優勝を，病室から見える冬の筑波山に祈念した。藤枝先生が亡くなられたのは，それから間もなくのことであり，当時の残像が今なお脳裏を離れない。サッカー部の優勝を先生の墓前に報告する日が来ることを願ってやまない。

私の居住する取手市内には，新四国相馬巡礼の霊場がいくつか散在する。この新四国相馬霊場は，取手市内にある臨済宗の名刹，長禅寺の観覚光音禅師が江戸時代中期に高野山で修行した後，四国霊場の土を持ち帰ったことに由来しており，典型的な霊場の「うつし」である。藤枝先生のご葬儀後，市内の鄙びた霊場に足を運び，先生のご冥福を祈念した。

お盆やお彼岸に死者の霊魂が来世と現世を往来するとの死生観は，われわれ日本人の間で広く共有されている。盆船や灯籠流しは，海の彼方にあるとされる他界と現世を結ぶ伝達手段であったし，お彼岸には生者が祖先の霊を迎えるため，三途の川を象徴する水桶を手に，死者の世界（墓地）に足を踏み入れるのである。こうした死生観を基盤とする限り，生者のみならず死者も共同体の一員たらざるをえない。流通経済大学社会学部という共同体は，異界の住人たる藤枝先生や元学部長の渡辺先生を共同体の一員として含んでいるのである。生者と死者の共同体，死者の加護による生者の共同体の存続と

繁栄という思念は，狂人の夢幻ではなく，人類共通の異界観に他ならない。

藤枝先生の享年は62歳であり，日本人男性の平均寿命から見ても10歳ほど早い。私は既に50代半ばに達しており，先生の年齢まで10年弱である。先生の早世は衝撃であり，私の人生観にも少なからざる影響を与えた。何をやりたくて，何をやりたくないのか。何ならできるのか。いま一度考え直す機会となった。藤枝先生が奥様とお二人で，イタリア旅行を計画されていたとの話も耳にした。先生の早世が悔やまれてならない。合掌。